

まくらのさうし
枕草紙

あけぼの
春は曙。

くも ほそ
雲の細くたなびきたる。
しろ やまぎは むらさき
やうやう白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる

なつ よる
夏は、夜。

ころ
月の頃は、さらなり。

やみ ほたる
闇もなほ。螢飛とびちがひたる、また、ただ一つ二つな
ど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。あめ ふ
雨などの降るさへ
をかし。

あき ゆふぐれ
秋は、夕暮。

ゆふひ は ちか からす
夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏のねどころ
へ行くとて、三つ四つ、二つなど飛びいそぐさへ、あはれな
り。まいて、雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、
いとをかし。い かぜ おと むし
日入りはてて、風の音、蟲のねなど、はたいふ
べきにあらず。

ふゆ
冬は、つとめて。

ゆき しも
雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜のいと白きも、
またさらでもいと寒きに、さむ ひ いそ すみ
火など急ぎおこして、炭もてわた
るも、いとつきつきし。ひる
晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけ
ば、ひおけ はい
火桶の火も、白き灰がちになりて、わろし。